

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (11)

久居 宣夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (11)

Nobuo Hisai *

はじめに

今回は、1998年1月～1998年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居、1998）までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」（国立科学博物館附属自然教育園、1984）中で、r：“稀”，または（r）：“古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは原則として上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日と目撃または捕獲地点及び目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、日頃より種々のご教示と同定をいただいている東洋大学の東野正男教授、国立科学博物館動物研究部の大和田守氏・友国雅章氏・篠原明彦氏ならびに貴重な記録を提供して下さった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

Acanthosoma crassicaudum Jakovlev フトハサミツノカメムシ（半翅目 ツノカメムシ科）（1998.9.6 展示ホール内）著者同定、友国雅章氏確認

教育管理棟内（図1参照）の展示ホールの壁面に止まっていた個体が捕獲された。

本種は国内では本州・四国・九州に分布し、6月頃からイヌザクラ、ソメイヨシノなどのバラ科の植物で得られる（宮本、1965）。展示ホール南側の緑地にはソメイヨシノが植栽されているので、ここで発

* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

生じた個体が建物内に入ったものであろう。

本園ではここ数年間に、ツノカメムシ類の新記録あるいは再記録が相次いでいるが(久居, 1993, 1994, 1995), 本種はこれらツノカメムシ類の中でも個体数が少なく稀種に属するものである(安永他, 1993)。

Scopelodes contracta Walker
ヒメクロイラガ(鱗翅目 イラガ科)(1998.7.4 正門付近)
著者同定, 大和田守氏確認

正門脇よりインセクタリウムへ行く小道の途中で、低木の葉に止まっている個体が捕獲された。本種の幼虫は、以前正門前のケヤキで観察されていることから、この個体もケヤキで発生したものと考えられる。

国内では本州・四国・九州に分布する普通種で、平地に多く産するものの産地は局地的であるという(井上, 1982)。

本種は年1~2回、カキ・サクラ・ケヤキなどで発生し、時にはカキやアブラギリで多発することが知られている(奥野他, 1997; 井上, 1982; 宮田, 1983; 中臣, 1987)。

Culcula panterinaria (Bremer et Grey) キオビゴマダラエダシャク(鱗翅目 シャクガ科)(1998.7.5 建物跡地付近の路傍 桑原香弥美氏) 著者同定, 大和田守氏確認

建物跡地付近の路傍にいた個体を桑原氏が捕獲した。本種の分布は本州・四国・九州・対馬で、平地から低山地に生息し、特に関東地方以西の山地に多産する普通種である(井上, 1959, 1982)が、本園ではこれまで記録がもれていた種である。

幼虫の食餌植物はリンゴ・アブラギリ・サワグルミ・ヌルデ・コナラ属が知られているが、本園では園内に多く生育するヌルデで発生しているものと考えられる。

Chlorophorus muscosus (Bates) フタオビミドリトラカミキリ(鞘翅目 カミキリムシ科)(1998.7.14 水生植物教材園 大野正男氏)

水生植物教材園の中央部に生育するミソハギの近くの花上に止まっている個体を大野氏によって目撃された。本種は上翅の黒色横紋の変異が大きいことが知られているが、この個体は黒色横紋が正常のもの

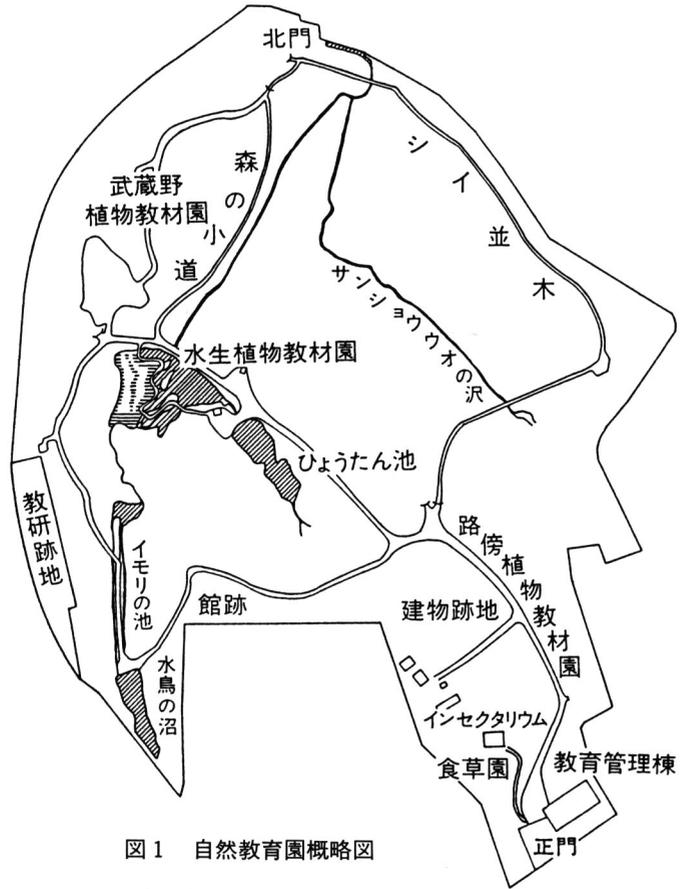


図1 自然教育園概略図

のよりも細かったという（大野氏のご教示による）。

国内では本州～九州・佐渡島・伊豆諸島・対馬・壱岐・屋久島・琉球などに広く分布する。また、本種は黒潮が流れる沿岸地方のかなり北までの、暖帯から温帯樹林帯の花に集まり、海岸気候性カミキリの指標種と考えられている（林，1984）。

Agencimbex jucunda Mocsáry ホシアシブトハバチ（膜翅目 コンボウハバチ科）（1998.4.19 正門付近の路傍 大澤陽一郎氏）著者同定，篠原明彦氏確認

正門付近の路上を歩行している個体を大澤氏によって捕獲された。

本種は本州～九州に分布し、幼虫はエノキを摂食する（奥谷，1977）。年1化で、春に出現する。本種は、関西地方でも比較的少なく、東京近郊ではごく稀で、関東地方では栃木県での採集例を除きほとんどないとのことである（篠原氏のご教示による）。

Vertebrata 脊椎動物門

Aves 鳥綱

Anas acuta acuta Linnaeus オナガガモ（ガンカモ目 ガンカモ科）（1998.10.8 水生植物教材園 藤村仁氏）

本種はユーラシア大陸及び北米の中部以北で繁殖し、日本へは秋に渡来する冬鳥である（小林，1976）。海湾・河川・湖沼などに生息し、日中は大群で休息し、夕刻から湿地・沼沢・水田などで摂餌する（清棲，1966）。

Falco subbuteo subbuteo Linnaeus チゴハヤブサ（ワシタカ目 ハヤブサ科）（1998.9.9 インセクタリウム 藤村仁氏）

インセクタリウム上空を飛行する個体が目撃された。

本種はユーラシア大陸の北部に広く分布し、国内では北海道・本州北部で少数ながら繁殖している。草原や農耕地などの広々とした場所で、飛翔しながら野鳥類を襲い捕食することが多いが、ときには昆虫類なども餌とする（清棲，1966）。

2. 稀種の記録

(1) 昆虫類

Polycanthagyna melanictera (Selys) ヤブヤンマ（蜻蛉目 ヤンマ科）（1998.7.4 展示ホール前及び建物跡地付近）

教育管理棟の展示ホール前で、午前中ネズミモチの葉上に止まっている個体を目撃。その後、同日の午後に建物跡地脇にある通称「カワセミの池」の赤土の壁面で産卵行動をしている個体が観察された。園内での目撃個体数が少ないことから、これらは同一個体であろうと考えられる。

なお、本種は通常樹陰の多い池沼の、水辺から少し離れたコケ類や泥中に産卵する（浜田・井上，1985）。これまで園内では、武蔵野植物教材園の小池で数回繁殖しているのが観察されている（久居，1990，1993，1998）が、今回観察された産卵場所は、建物跡地の草はらに造成された全く樹陰のない人工の溜め池である。

Losbanosia hibarensis (Matsumura) アヤヘリハネナガウンカ (半翅目 ハネナガウンカ科) (1998.6.27 インセクトarium前)

本種は1996年に初記録された種で(久居, 1997), 今回もインセクトarium前で目撃された。

Papilio helenus nicconicolens モンキアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) (1998.4.29 正門付近 吉井三恵子氏; 5.1, 5.2 食草園; 7.2 水生植物教材園 桑原香弥美氏 2個体; 7.5 水生植物教材園 矢野亮氏; 7.8 食草園; 7.10 水生植物教材園; 7.12 建物跡地及び路傍; 7.14 路傍)

1998年は例年になく本種の目撃例が多かった。しかし, 目撃された期間から推察すると4.29~5.2と7.2~7.14の記録はそれぞれ別の同一個体を目撃していたと考えられる。ただし, 7.2の目撃記録は明らかに別個体であったということから, この期間は2個体が園内にいた可能性もある。

Narathura japonica japonica (Murray) ムラサキシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1998.9.25 森の小道入口 桑原香弥美氏)

本種は秋季に稀に目撃されるが, 最近少なくなってきたように考えられる。

Antigius attilia attilia (Bremer) ミズイロオナガシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1998.5.24 建物跡地, 5.31 三叉路; 6.26 インセクトarium付近 矢野亮氏)

5.24の記録は羽化直後の新鮮な個体で, 5.31は死亡間もない個体を路上で見つけたものである。本種は毎年のように観察される。

Rapala arata (Bremer) トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1998.4.19 正門付近の路傍 萩原信介氏; 4.23 建物跡地)

4.23の記録は新鮮な個体であった。本種もここ数年毎年観察される。

Curetis acuta paracuta Nicéville ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1998.8.23 あずまや前, 8.26 食草園, 9.23 森の小道中間, 9.25 森の小道入口, 11.3 食草園)

以前と比較して, 夏~初秋の目撃例が増えている。

Parantica sita nipponica (Moore) アサギマダラ (鱗翅目 マダラチョウ科) (1998.9.30 路傍植物教材園の土塁付近 桑原香弥美氏)

Kaniska canace (Linnaeus) ルリタテハ (鱗翅目 タテハチョウ科) (1998.5.15 水生植物教材園ベンチ前, 7.21 インセクトarium付近及びイモリの池 各1個体, 8.20 水鳥の沼のベンチ前, 9.5 建物跡地以上矢野亮氏; 7.1, 7.5, 7.14, 8.2, 8.13 以上水鳥の沼のベンチ前)

本種は以前は普通種であったが, 最近では目撃例が少なくなり個体数の減少が危惧されている(図2)。この原因については, 園内には幼虫の食餌植物であるユリ科のホトトギス・ヤマユリ・サルトリイバラなどがふつうに生育していること, 成虫は花蜜よりもクヌギ・コナラ・クリなどの樹液を好むこと(福田他, 1983)などから, 食草よりもむしろ成虫が好む樹液との関係によるものと考えられる。

1998年は水鳥の沼前に設置されているベンチ周辺でしばしば観察され、夕刻にテーブル替わりに置かれた岩の上に止まる占有行動が見られた。夏季の目撃例は同一個体の記録かもしれない。

Melanitis phedima oitensis Matsumura クロコノマチョウ (鱗翅目 ジャノメチョウ科)

(1998.9.23 あずまや付近; 10.4 インセクタリウム付近 矢野亮氏)

本種は以前にも2回、いずれも正門からインセクタリウムに行く小道で記録されている(久居, 1989, 1995)。今回も上記の場所で10.4に新鮮な個体が観察されたほか、

9.23にはかなり離れた園内の中央部の、水生植物教材園南側に設置されているあずまや付近で捕獲された。なお、この日の前日は台風7号の通過による強風が吹いた。



図2 最近個体数が減少しているルリタテハ (吉井三恵子氏撮影)

Actias artemis (Bremer et Grey) オオミズアオ (鱗翅目 ヤママユガ科) (1998.7.21 路傍植物教材園 矢野亮氏; 9.5 水生植物教材園 吉野由美子氏)

7.21の記録は路傍植物教材園のイロハモミジを摂食していた幼虫を、また9.5は成虫を目撃したものである。

本種は本州~九州・対馬・屋久島などに広く分布する普通種であるが、本園での記録は少ない。1998年は都内での発生が多かったようで、上記のほか5.21には渋谷区代々木の住宅のシラカバで発生した成虫が著者によって確認され、また7.9には皇居内でもイロハモミジについていた幼虫が著者らに観察されている。

幼虫はバラ科(サクラ・ウメなど)・ブナ科(コナラ・クリなど)・カバノキ科(ハンノキ・カバノキなど)・カエデ科(オオモミジ・イロハモミジなど)・ミズキ科(ミズキなど)などに発生するかなりの広食性である。成虫は年2回、春と夏に出現し、平地にも山地にも多産する(井上, 1959, 1982; 宮田, 1983; 中島, 1987)。

(2) その他

Geothelphusa dehaani (White) サワガニ (十脚目 サワガニ科) (1998.7.2 水生植物教材園 大澤陽一郎氏)

本種は15年前に園内で記録されている(久居, 1987)が、その後全く目撃記録がなかった。園内で繁殖していたものか、あるいは放逐されたものか明らかではない。しかし、いずれの記録もひょうたん池付近~水生植物教材園であることから、繁殖しているならばひょうたん池の湧水地付近ではないかと考えられる。

Trionyx sinensis japonicus Temminck et Schlegel スッポン (カメ目 スッポン科) (1998.10.15 水鳥の沼 桑原香弥美氏)

今回は、水鳥の沼で甲長約20×16cmの個体が捕獲された。本種は1989年にも捕獲されたことがあり(久居, 1990), またその後本園の職員による目撃情報も寄せられている。

本種は自然分布ではなく、人為的な放逐によるものと考えられる。

Elaphe conspicillata (Boie) ジムグリ (トカゲ目 ナミヘビ科) (1998.10.13 シイ並木出口 矢野亮氏)

本種は個体数は少ないが、園内にまだ生息している。今回は体長30~40cmの幼蛇の目撃例である。

Aythya fuligula (Linnaeus) キンクロハジロ (ガンカモ目 ガンカモ科) (1998.12.17 藤村仁氏; 12.18 藤村仁・武藤幹生氏 以上水生植物教材園)

国内では北海道で繁殖するものも知られているが、冬季に冬鳥として日本各地に渡来する。冬は東京湾・霞ヶ浦・牛久沼などの比較的浅い所に大群で生息する。本園では1989年に初めて飛来した記録がある(久居, 1990)。

Milvus migrans (Boddaert) トビ (ワシタカ目 ワシタカ科) (1998.7.28 正門付近 武藤幹生氏)

正門付近の上空を飛翔する個体が目撃された。

本種は市街地・農耕地・海岸などに多く見られ、かつては自然教育園の上空を相当数の個体が飛翔するのが観察されたというが、近年では稀に目撃されるにすぎない。

Porzana fusca erythrothorax (Temminck et Schlegel) ヒクイナ (ツル目 クイナ科) (1998.10.13 建物跡地付近 矢野亮氏)

建物跡地脇の通称「カワセミの池」付近で目撃された。

本種は日本へは夏鳥として中国大陸・インドシナ半島より渡来する。本園では1987年に初記録されている(久居, 1989)。

Tringa hypoleucos Linnaeus イソシギ (チドリ目 シギ科) (1998.8.6 水生植物教材園前のベンチ横 藤村仁・武藤幹生氏)

本種は夏鳥として渡来し、本州以北で繁殖する。冬は南方へ渡去するが西日本で越冬する個体がいることも知られている。

Scolopax rusticola Linnaeus ヤマシギ (チドリ目 シギ科) (1998.8.28 職員通用門付近 藤村仁氏; 11.11 イモリの池付近 藤村仁・武藤幹生氏)

本種は本州中部以北では夏鳥として渡来し、本州中部以南では冬鳥や旅鳥である。よく繁った林の中に生息する。

Cuculus canorus telephonus Heine カッコウ (ホトトギス目 ホトトギス科) (1998.6.11 水生植物教材園 矢野亮氏)

本種と次種は、夏鳥として飛来する渡りの途中に、時々鳴き声や姿が確認される。

Cuculus poliocephalus poliocephalus Latham ホトトギス (ホトトギス目 ホトトギス科) (1998.6.7 正門付近 武藤幹生氏)

Apus affinis subfurcatus (Blyth) ヒメアマツバメ (アマツバメ目 アマツバメ科) (1998.12.17 水生植物教材園 藤村仁氏)

本種は本来東南アジアなどに分布する野鳥であるが、日本でも30年程前から本州・四国・九州で繁殖することが知られている。

Apus pacificus kurodae (Domaniewski) アマツバメ (アマツバメ目 アマツバメ科) (1998.9.18 水生植物教材園 藤村仁氏)

本種も日本へは夏鳥として3月下旬～4月上旬に飛来して本州以南で繁殖し、9月中旬～10月下旬に飛去する。

Anthus hodgsoni hodgsoni Richmond ビンズイ (スズメ目 セキレイ科) (1998.10.29 館跡 藤村仁・武藤幹生氏)

本種は主として本州中部以北の山地で、草原の地上の草の茎・葉・コケ類などで巣を作り繁殖し、冬は暖地へと移動する。

Pericrocotus divaricatus divaricatus (Raffles) サンショウクイ (スズメ目 サンショウクイ科) (1998.8.6 水生植物教材園 藤村仁・武藤幹生氏)

水生植物教材園の上空を飛翔する個体が目撃された。

本種も夏鳥として日本に渡来する。これまでにも飛来時の目撃例はあるが、園内での飛去時の目撃記録は稀であるとのこと (藤村氏のご教示による)。

Turdus dauma aureus Holandra トラツグミ (スズメ目 ヒタキ科) (1998.12.9 三叉路付近 藤村仁氏)

本種は本州では低山帯や亜高山帯の森林で繁殖するが、本州中部以北のものは冬期に温暖な地方へ移動する。

Muscicapa griseisticta (Swinhoe) エゾヒタキ (スズメ目 ヒタキ科) (1998.10.15 イモリの池付近 藤村仁・武藤幹生氏)

本種はウスリー地方・沿海州・カムチャツカ・サハリンなどで繁殖し、冬はマレー半島などで越冬する。日本には春と秋の渡りの途中に、旅鳥として通過する。

Uragus sibiricus sanguinolentus (Temminck et Schlegel) ベニマシコ (スズメ目 アトリ科) (1998.11.4 藤村仁氏; 11.5 武藤幹生氏 以上水生植物教材園)

本種は青森県以北では夏鳥として渡来し繁殖する。本州以南には主として冬鳥として渡来し越冬する。

Pyrrhula pyrrhula griseiventris Lafresnaye ウソ (スズメ目 アトリ科) (1998.11.23 武藤幹生氏 ; 11.25 桑原香弥美氏 以上森の小道)

本種は北海道の山地及び本州中部以北の亜高山帯で繁殖し、冬期は山麓や平地に移動する。

引用文献

- 福田晴夫他 8 名, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (II). 325pp. 保育社.
- 浜田康・井上清, 1985. 日本産トンボ大図鑑. 第 2 巻解説編:129-291. 講談社.
- 林匡夫, 1984. カミキリムシ科. 「原色日本甲虫図鑑 (IV)」(林匡夫他編著), 1-146. 保育社.
- 久居宣夫, 1987. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(1). 自然教育園報告, (18): 41-44.
- 久居宣夫, 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20): 1-13.
- 久居宣夫, 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21): 11-21.
- 久居宣夫, 1993. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(5). 自然教育園報告, (24): 1-8.
- 久居宣夫, 1994. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(6). 自然教育園報告, (25): 29-33.
- 久居宣夫, 1995. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(7). 自然教育園報告, (26): 23-27.
- 久居宣夫, 1997. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(9). 自然教育園報告, (28): 27-31.
- 久居宣夫, 1998. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(10). 自然教育園報告, (29): 13-17.
- 井上寛, 1959. ヤママユガ科. シャクガ科. 「原色昆虫大図鑑第 1 巻 (蝶蛾篇)」(井上寛他著), 92-95, 176-224. 北隆館.
- 井上寛, 1982. イラガ科. シャクガ科. ヤママユガ科. 「日本蛾類大図鑑第 1 巻 解説編」(井上寛他著), 297-301, 425-573, 587-590. 講談社.
- 清棲幸保, 1966. 野鳥の事典. 413pp. 東京堂出版, 東京.
- 国立科学博物館附属自然教育園, 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 小林桂助, 1976. 原色日本鳥類図鑑, 増補改訂新版. 248pp. 保育社.
- 宮本正一, 1965. ツノカメムシ科. 「原色昆虫大図鑑第 3 巻」(朝比奈正二郎他監修), 80-82. 北隆館.
- 宮田彬, 1983. 蛾類生態便覧 (上巻). 668pp. 昭和堂印刷出版事業部, 長崎.
- 中島秀雄, 1987. ヤママユガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」(杉繁郎編), 122-125. 講談社.
- 中臣謙太郎, 1987. イラガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」(杉繁郎編), 16-19. 講談社.
- 奥野孝夫・田中貫・木村裕, 1977. 原色樹木病虫害図鑑. 365pp. 保育社.
- 奥谷禎一, 1977. コンボウハバチ科. 「原色日本昆虫図鑑(下)」(伊藤修四郎他編), 全改訂新版. 295-296. 保育社.
- 安永智秀・高井幹夫・山下泉・川村満・川澤哲夫, 1993. 日本原色カメムシ図鑑 (友国雅章監修). 380pp. 全国農村教育協会. 東京.